# 目次

はしがき……一
松村明教授年譜……七
松村明教授執筆目録……三
抄物に見える「サテ」（不可）について……坂詰　力治……一
——「カナ（叶・適）ハヌ」との比較を通して——
イソガシ・セハシ・アワタタシとその類語……小林　賢次……一九
——中世・近世における〈多忙〉〈性急〉を表す語の展開——
和語の撥音と漢語の撥音……柳田　征司……四一
——『天草版伊曽保物語』の場合——
国字本伊曽保物語の心話文……阿部　八郎……五七
国語史的注釈試論『大かうさまぐんき』

〈会津御動座・御知行割〉……小林　千草……八三
近世節用集の価格……佐藤　貴裕……二一五
『夢酔独言』における合拗音……神戸　和昭……二三一
明和～天保期江戸語における男性の
係助詞ハの融合……小松　寿雄……二四九
曲亭馬琴の読本の口語語彙……鈴木丹士郎……二六五
江戸・明治期における可能を表す
訓読形式の変遷――「得」と「（不）能」――……斎藤　文俊……一八三
「塵一つ落ちていない」のような言い方
について……中野　伸彦……二〇五
存在、不存在を意味する「ゐる」「ゐず」
について……鈴木　博……二一九
〈ローマ字〉を歴史の眼でみる……杉本つとむ……二三九





――危機に立つ日本語――

『訳和蘭文語』から『小学日本文典』、
『日本文典』へ……古田　東朔……二六五
「死ぬ」と「死す」――和訳聖書に関連して――……鈴木　英夫……二八九
明治時代における漢訳語の影響……松井　利彦……三一一
てよだわ言葉小考――尾崎紅葉の観察から――……土屋　信一……三三九
矢野文雄の文章と文章観（承前）……進藤　咲子……三四七
――明治二三年以降の軌跡――
北海道のアイヌ語地名に当てられた漢字……鏡味　明克……三六九
京都町屋の性向語彙序説……寺島　浩子……三八五
「伊吹島」アクセントの背景……山口　幸洋……四〇九
社会言語学的事情と比較言語学的理論
「ている・てある」受身文の諸相……森田　良行……四二五
近代語における否定条件句……田中　章夫……四四一

談話の性格と人称制限……南　不二男……四五七
存在表現の構造と意味……金水　敏……四七三
テレビドラマ名の特徴と変化……杉本　妙子……四九五
——過去三五年間における用字法とタイトル型から——
虚実皮膜の笑いの系譜……中村　明……五一七
——井伏鱒二初期作品の「うやむや表現」の諸相——
語感をめぐって……宇野　義方……五三九
現代日本語の漢字……森岡　健二……五五九
人間一心覗替操総索引……山口　豊……五九三
『日本国語大辞典』（第二版）における
初出文献の改訂……宮島　達夫……六二八
執筆者略歴……六三九



# 松村明教授年譜

一九一六年　九月　三日　東京市神田区錦町一丁目十二番地に生まれる
一九二三年　四月　神田区立小川小学校へ入学
九月　本郷区立駒本小学校へ転校
一九二九年　三月　同　卒業
四月　京北中学校へ入学
一九三四年　三月　同　卒業
四月　浦和高等学校文科丙類へ入学
一九三七年　三月　同　卒業
四月　東京帝国大学文学部国文学科へ入学
一九四〇年　三月　同　卒業
四月　国際学友会日本語学校教授
一九四四年　八月　文部省図書監修官補
一九四六年　七月　第七高等学校教授
一九四八年　四月　鹿児島大学文理学部助教授

小文吾は只呆れ果て、取るにも足らぬ酔狂人と口角ひ、益なしと思ひかへして（南総里見八犬伝・七四回）

主客共侶に乱酔して、口角をしいだしたる（同・一二八回）

のように「口角」を「ことばあらそひ」「ことばたたかひ」とよんでいる例がみられる。

「角口」については馬琴自身が次のように説明している。

角は競也。觝は抵なり。唐山の俗語に、言葉戦を角口といふ。その義これと同じ。角觝は力士牛頭を戴き、両々相当り、相抵て勝負をなせり。（八犬伝第七輯巻之五に附記す闘牛考 幷に小狗の畧説）

また、黄六鴻の『福恵全書』をみると、

或係下與二某人一角口争鬧、自已縊死投レ河刎死上（刑名部、十四・人命上 莊地呈報）

若姑媳彼此反レ唇、夫婦偶爾角口、與二妯娌街鄰一争詈、一時憤激捐レ生（同、十五・人命中 自盡）

とあり、小畑行簡の訓点本に拠るといずれにも「クチアラソヒ」の訓がほどこされている。「口角」も『福恵全書』にみとめられる。

至二張忠一始以レ吝レ麦生レ嫌、張信継以二口角一益レ釁（刑名部、十二・問擬 寃抵二母命一事）

この「口角」にも「角口」と同様に「クチアラソヒ」の訓がみられる。

ちなみに『俗語解』には「角口　類云相争也」「口角クセツ」とあり、市川清流の『雅俗漢語譯解』になると「角口」に「イヒアラソフ」が加わり、「口角」の方は「イヒアラソフ」に改変されている。

訓の方の語として馬琴の読本には「くちいさかひ」「いさかひ」「ことばあらそひ」「ことばたたかひ」などがみられ、さらに、

今さら無益の口論に時を移さば期に後れん。兵毎艦を疾遣らずや（南総里見八犬伝・一七五回）

とある「くちろん」や、「口論」「くち喧嘩」「くちあらそひ」「いひあらそひ」などが加わり、類義語群が形成されることになる。語相互の関係・消長などについての考察は今回の目的でないので深くは立ち入らないが、これらのうち「くちいさかひ」「くちあらそひ」「ことばあらそひ」「くち喧嘩」は新しい語ではないかと思われる。

次に、ほんの少し前、を意味する語に「いまがた」がある。この語も近世以降に現われたものと考えられる。江嶋其碩の『けいせい色三味線』に、

かの女郎の事を聞ば、今方御出にて座敷にござりますとの事、女郎のおためによい事申に参つた。（江戸巻・四）

とあり、『春色恋白波』に、

アイ、大方最う七時でござゐませう。今方豆腐屋の声が仕ましたから（二編三）

アノネ、今方のこつてありましたか、私の見世へ何処のかお武家さんに追かけられて、アノ源さんがお逃込だつたヨ（同）

とある。馬琴の読本にも「いまがた」は頻繁に用いられている。しかし、当てられている漢字の方をみるとさまざまで変化に富んでいる。

いと安らかにその事果て、方纔還らせ給ひにき。（南総里見八犬伝・七七回）

依介が妻水澪は、方纔帰宅の折なれば（同・一二三回）

撃捕たる首二十餘級、方僅梟て這里に在り。（同・九五回）

主君は方僅退られたり。（同・一三六回）

綷過ぎて適纔這里に来にければ（同・八〇回）

北るを趕ふて捷径より剛才這里に来つる也。（同・九三回）

きのふの朝歇店を立出、路次をいそぎて剛才帰著仕りぬ。（同・九六回）

他の場合と同様に白話小説語を収めた辞書についてみると次のようである。